Chapter 6

1　日本制覇

イユノは膝を高く組んで肘を龍車の窓枠に乗せ、龍肯に連絡を取った。青き龍神の刺青は精緻精細に生々しくも美しく鮮やかに全身に廻りそうな勢いを湛えていた。また皮膚は赭(あか)くなり始めている。

「元気だったかしら？

ところで、わたしは王命に逆らうことにしたわ。

いまはそれがわたしの現実なの。

ああ、それからあんたが言っていた聖令はなかったわ。もともと気にしてなかったけどね。

で、さぁ、わたし、イユノ・アスラ＝彝甃羅妻は正式に彝之家に叛逆する。眞神一千五百年の誓いを破って、大日本を統ぐ大日霎貴神に物申す。

これも運命ね。

結果的に見れば他の結論はなかったのよ。運命なんか存在しないって言う人がいるけど、それは違うわ。運命はある。愚かな人たちはこう考えている、『世の中には様々な選択肢があって我々はそのうちの一つを選ぶ。もしあのときにあれを選んでいなかったら違う運命にいまあったはずだ』と。

愚かだわ。無数の選択肢はない。一つの存在しかないのよ。ただそれは結果を見なければわからない。運命を変えたと主張する愚人がいるけど、その変わった方の運命がその人の運命なのよ。あはは。

ものは考えようね。結局、運命は見通せないからわからない。まあ、無いってことと同じだとも言えるわね。ふふ。

現実には一つの世界しかない。

ただ誰にも結果がわかっていないだけ！」

「なるほど。

それはそれで認めよう。君が叛逆したいと考えたことについては。とは言っても、君が短絡的な行動をとったことに変わりはない。叛逆は正しい選択ではない。

イユノ・アスラ、事象は常に複合的な要因によって構築されている。それは君も熟知しているとおりだ。歴史によって積み上げられた結果が今日であることを忘れるな。

いや、君の気持に対しては一定の理解を示したい。が、しかし早まるな。短絡的に判じて拙速に事をなしてはならない。遅滞は赦されないが、人は正しく生きるために深く早く考えるべきなのだ。

そう、深く考えることは長く考えることではない。そもそも思惟は何か。生物の歴史を見よ、人間の眼からは思考に見えぬかもしれないが、すべての生物は思考している。逆に言えば人間の思考は人間が思っているような思考ではないのだ。

いや、いまはそれを語るべきときではない。イユノ・アスラ＝彝甦羅婁よ、現実は言語ではない。歴史を顧みよ。

千五百年の歴史にはそれなりの意味があるのだ、その大義のために歴史の中に名も残さず消え、虚しくその命を捨てた人間も多くいるのだ。

君はそれを無為徒労に帰させるのか。早まるな。鑑み慮れ。何度も言うが、熟慮せよ。拙速に事起こす莫れ」

「いや。

もう、うんざりだ。

わたしたちは潔癖を貫いた。しかし大倭（おおやまと）は腐敗堕落し、その本来の清（す）み明（あけ）き精神を喪っている。奴らにあるものは保身と疑惑ばかりだ。猜疑ばかりだ。身を守るために生きている下劣な獣に過ぎない。

よいか。これは正義の戦いだ。

嘘偽りばかり、形ばかり、事なかれ主義の保身ばかりの糞どもの世界を叩き潰す」

電話を切った。そして彝之〆裂にも連絡した。

〆裂は淡々としていた。

「そうか。
好きにやれ。
おまえは阿修羅だ。宇宙の主宰者だ。おまえが宇宙そのものだ。だからおまえは無誤謬だ。おまえに間違いは存在し得ない」
「そうよ。
当然じゃん。
好きにしろなんて、いまさら改めて言われたくないわ。それしかないんだから。
それから言っとくけど、同源家の布羅児若はこっちにいるわ。
いなくても心配しなくていいわ」
「わかった。ふ。これが歴史さ」
イユノ・アスラ軍は進軍した。
やがて第一の鳥居の外に出て、薙久簑町の域内に入ると、イユノは打って変わって、太陽のように縁取られた双眸をギラギラ煌めかせ、楽しそうに微笑み、「何か怪しいわ」
アカネが不愉快そうな顔で、
「何がよ」
「不穏な何かを感じるのよ。わくわくするわ」
「あんた、だんだん修羅っぽくなっていくわね」
「それが本性なんだからしょうがないじゃないの。ふふ」
「その腕も」
青龍の刺青は肩や背に広がって、尻や胸に廻り始めていた。亨らかで瞭かに啓かな哲らかさで晃かに彬らけく亮らかに睿らけくも強く烈しく鮮やかに肩に至るまで伸び拡がっている。燃えて熾えて焔え灼えて烺え炻え爍え炸くように輝いて見える。蒼く。碧く。青く。
「そのうち全身に回るわ。凄く楽しみ」
イユノは血の滾りを感じる。「熱いのよ」
心配そうにユレヒトが、
「大丈夫ですか、イユノ様。窓を開けましょうか」

「いいえ。何でもないわ」

それは確かによく晴れた午前十時ではあったけれども、何か暗鬱な、まるで『アッシャー家の崩壊』のようなムードを漂わせていた。しかしそれは逆にイユノの野性を目覚めさせ、より凶暴性を発き立てるかのようであった。

イヴィルは静かに微笑む。ユレヒトはドアを開けて外に出た。龍車のふちを伝って駅者台にいるヌエのところへ行くのだ。

茸柳が、

「住宅が増えてきた。街はもう近いね」

ユレヒト戻って来て、

「間もなく薙久簔の街に入るそうです。

斥候の連絡に拠れば神中洲中央公園に屯するヤマト軍は天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命と、かつての征夷大将軍、いま新たに征狄将軍に任ぜられた坂上田村麿の荒御魂が率いる神ヤマト日向神軍です。

綿津見大神や大山津見神、日子穂穂手見命や火照命、火須勢理命がいます」

「あら、素敵ね。

体が疼くわ。

待ちきれないよ」

イユノが突如姿を消した。

ユレヒトがアッと叫び、

「あゝ、イユノ様っ！　大変だ」

しかしアカネは、

「心配ないわ。

……むしろヤマト軍を憐れむべきね」

そのとおりであった。

神中洲中央公園に着くと、神霊の残骸、越前水母のような骸の山で、その真奥に赤い噴水のように血塗れのイユノが独りで立っていた。

ギラギラした太陽の眸で。
「取り逃がしたわ。ぁはは。
畜生、逃げられてしまったわね」
そう言って高らかに哄笑する。
「ランチタイムにしようか」
正午であった。
公園にタープを張ってテーブルを用意する。イユノは肉を頬張り貪り、草上の正餐。血の赤と草の緑のあざやぎ。むろん常人には神霊の鮮血は見えないが。
イヴィルが赤きワインを堪能する。
「うーん、素晴らしいですね。グラン・クリュ、どこのシャトーですか」
そう言いながらラベルを眺める。道行く人や車が奇異の眼で彼らを見ていた。
真っ白なテーブルクロス、ユレヒトが給仕する。白緋の美。
生牡蠣や茹で上がったオマール海老には卵の詰まった珊瑚色の卵巣から旨みがあふれ湧き……デザートのは山羊のチーズ、濃厚で芳醇な香り。
思わず、『ジョゼフィーヌ、余は今日、疲れているのだ』と言いたくなるような奥深い匂い。血の匂いとのブレンドが芳醇な味わいを舌の上に沁み入らせる。
「さて、行くか」
イユノは立ち上がった。ヌエはどこで食事を済ませたのか、既に馭者台に整然と坐っていた。龍が牽く。海路から来たヤマト軍の姿は相変わらず見えない。
「だいたい、岩裂神根裂神などの日光系の星の神々や、武甕槌や布都御魂（韴霊剣）など鹿島・香取の神、出雲の素戔嗚尊の眷属らはどこへ行ったのか。そもそも、いい加減、シノブが見つからないものか」
イユノは焦燥した。

ヌエが龍車を停めた。

「どうした」

ユレヒトが窓から首を出して尋ねる。ヌエは抑揚のないかすれた声で、

「いま 淋太良（ながあめたろう）が制止をかけた。斥候兵を連れている。彼の配下の斥候が何か報告すべき事項を持って来たらしい」

「そう。

わかった」

斥候の報告は簡明であった。火々禽の柵で岩裂神・根裂神、武甕槌神や布都御魂神、日本を揺るがさんばかりの大国主命と素戔嗚尊の大神威が待っている、と。

しかも監視するかのように、神天照眞艮武雄神（かんあまてらすまらたけおのかみ）、摩醯首羅（まけしゅら）（大自在天、すなわちシヴァ神 शिव）とその大軍団が周りを囲んでいるらしい。シヴァと聞いて茸柳がピクリと反応したが、何も言わない。

「決戦だね」

イユノが微笑んだ。

かくして第二次火々禽の柵の戦いは始まったのである。

まず火々禽の柵は平原の真ん中にある。北が森と丘陵地帯で東が山脈、南が山岳地帯で西は街と海である。ヤマト軍はかつての関所を巨大に復活させた。

いや、関所というより砦だ。

不気味に黒く聳える。

岩裂神根裂神などの日光の星神が前衛、武甕槌や布都御魂など鹿島・香取の神が中衛、荒ぶる大国主命が神剣を佩いて炎のように立ち、陽炎のように揺らぎ揺ら揺ら揺れる素戔嗚尊の分御魂たる大神威が大国主の傍に霊山のように聳えている。

それはかつて標高1万メートルを超えていたと云われる噴火炸裂前の阿蘇火山のようであった。怒りに煮え滾り、その恐ろしさは凄まじい限りで勇猛果敢な平衛家の眷属らも震え上がる。

しかもその傍には炎の神、火山の神、火之迦具土神が立っている。

しかしイユノは歓喜に満ちて黄金に輝いた。
青く燃える青龍とそれは素晴らしいコントラストを做す。
「あはは、今日こそ雌雄を決しようぞ、日本で一番強いのはイワサクか、タケミカヅチか、はたまたスサノヲか、あるいは」
天を睨んで大哄笑する。
「はたまたアマテルか、ああ、このイシュラルか！　見ろ、これをっ！」
イユノ・アスラは城砦の上に一気に跳び上がると抜剣して火之迦具土神を切り裂いた。その瞬間、イユノ・アスラの唐紅の膚に青龍の刺青、紫摩黄金に輝く鬼神の姿となり、金装横刀一口、絲廿絢、絹十疋、調布廿端、鍬廿口（いわゆる負幸物）を眼前に現象さしめ、ならべた。
ならべ置いてから、それらを蹴飛ばし、破裂させる。さらに中空に舞うと、神天照眞艮武雄神（かんあまてらすまらたけおのかみ）の前に立った。
「監視役ご苦労さん。
マラの神？
シヴァ・リンガみたいな神様ね。もしかして外国傭兵ってとこかな？」
「お主は死にたいと見える。
神の死を与えてやろうか。地獄の底に堕して未来永劫に渡って復活できないよう、久遠の汚濁と苦しみの世界へと突き落して進ぜようぞ」
凄まじい底響く声で脅す。
「あはは、あは」
イユノは笑いながら、神剣で一刀両断する。
さすがのシヴァ神も目を剥いた。
「ぬぅ、何と、バカな！」
「何を驚くか。これがアスラの力だ。破壊の神シヴァよ。おまえの力はわたしの力に匹敵する。
ああ、シヴァとアスラの闘いとは。素敵だ。

きっと宇宙が揺れて崩れ出すぞ」

この弐神が対面すると、風に撓る樹木のように烈しく大地が震え揺らぎ、雷霆が極東一帯に轟いて雨のように稲妻が降り注ぎ、叢雲が渦巻いて大風が荒れ、海が持ち上がって陸地を襲い、地球の自転が途方もない軋み音を立ててずれ、太陽が南に動いた。

地殻が割れ、グラウンド・キャニオンのような巨大な亀裂が生じる。蒼穹に数多の彗星が走る。

「ほほう。そのようだ。我らが見(まみ)えるだけでこの大変異か。しかも出雲の勢も鹿島・香取も、日光も、いつの間にか消えている。俺もそうするか。宇宙が崩壊しては元も子もない。ヤマトに義理がないのは俺もだ」

「賢明だぞ。

さて、では次は・・・ふ。わたしが気づかぬとでも思うか」

そしておもむろに、出雲国造が新任のときに朝廷に参じて天皇に奏上する御世寿ぎの詞である出雲国造神賀詞（いづものくにのみやつこのかむよごと）を奏上した。ちなみに出雲の国造と紀伊の国造の新任式は特別に重要なものとされていたという。

「ぬぅおぉ」

どこからともなく呻きが聞こえる。イユノが激しく呼ばわった。

「高天の神王(かむみおや)、高御魂(たかみむすび)・神魂命(かむむすびのみこと)よ、ここの司令塔は汝らと見た。隠れていないで現われよ、このアスラの目が誤魔化せると思うなよ。さあ、この祝詞で炙り出されよ。

ききまらが出雲に強いた服属の祝詞だ。延々と代々の出雲国造が天皇に尽くした忠誠の歴史と、天皇への神宝と御贄の献上、そして長寿を祈る言葉が述べられている」

神王高御魂命、神王神魂命が現われた。

「無礼千万、思い上がった神よ。妖怪王よ」

「喚(おめ)くな。

それよりか、神の神なる二大神をここに派遣するなど、ヤマトは

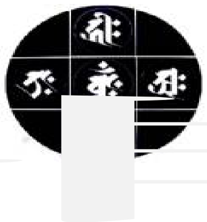
恐るべき力の入れようだ。いったい、ヤマトにはどんな情報が流れているのか。そうまでしなくてはならないと思わせるほどの情報とは……。しかしいまは問うときではない。

闘うときぞ。いやさ、覚悟せよ、大倭(おおやまと)の二大巨神よ！」

イユノは印契を結び、宇宙を込めた。いや、宇宙よりも巨大な何かを。三千の並行宇宙を。いや、９千億万の宇宙を魂(むす)び込めた。

「わたしも究極の陀羅尼を使うよ。究極最強最善最高最大最裂奥義、**摩訶般若波羅密多心經** प्रज्ञापारमिताहृदया よっ！」

瞑目し、詠唱する。静かに印契を組み換える。一切すべて何もかもが白光に包まれ、見えなくなった。燦眩たる空莫無非。



彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁
揭諦 揭諦、波羅 揭諦、波羅 僧揭諦、菩提 薩婆訶
गते गते पार गते पार संगते बोधि स्वाहा
彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁彝甆羅婁

その効験は凄絶であった。どのような力もこれに抗することなど叶わない。自他をも含めた宇宙一切であったから。イユノは軽々と撃破し、さらに南下する。

日光の神々も鹿島・香取の神々も出雲の神々も、火々禽の柵以来、消えてしまい、まったく姿も気配も見せなくなった。シノブのように……………。

眞神革命軍は進軍し、出羽柵、払田柵、城輪柵、磐舟柵、渟足柵で次々とヤマト軍を大撃破。撃破するたびに追従者が増えた。眞神郡からの〝脱藩〟兵は元よりも、蝦夷地、東北の荒ぶる、逝にしへの神々が加わっていく。軍はたちまち膨れ上がっていた。

すなわち出羽柵で２千、払田柵で５千、城輪柵で２万３千、磐舟柵

で五万、淳足柵で極東からも兵が集まり、十七万。
その勢いで、魚沼で勝利し、総勢三十万となるも、前橋で勝ち戦では五十五万へ、さらにさいたまでも大勝利し、ヤマト軍を徹底粉砕すると遂に百万を超え、その力を以てして終に荒川を下って東京に至った。
その時点でイユノは言った。
「さあ、そろそろリアルに戦おうか。
もう神霊的な存在で居続けなくてもいいよ。
現実態（エネルゲイア）になろう」
怪異な魑魅魍魎の百万鬼夜行が突如現われ、道路を占拠して行軍し、畑や庭を横切り、街を闊歩する。大混乱になったが警察では歯が立たない。内閣は緊急会議を開く。報道は特番を組んでこの事ばかり。
赤羽で自衛隊を粉砕し、国会議事堂を占拠すると、修羅の軍は各省庁と日本放送協会（ＮＨＫ）をも占拠し、イユノがカメラを前に全日本に号令した。これが世に言う大号令である。
「新憲法をここに発布する。

一　正しきを爲すを大義・究極真理・真実として一切これに由る
一　存在者は魂によって存在者となり、魂は行為によって自らを現象する
一　存在者たらざる者は存在者に非ず、活きるに価しない

以上だ。
全日本はいまからこれに従う。従わざるを激烈に処罰する」
さらには全世界の人間政府に日本が革命されたことを明確に宣言した。その衝撃が凄まじい勢いで世界を駆け巡る。あたかも異星人に突如侵略されたかのように。
後日談になるが、米中露欧連合はわずか一週間で軍を結集したが、米海軍は沖縄諸島周辺海域で戦艦や航空母艦が次々撃沈され、露西

亜軍はカムチャッカ半島、オホーツク海、サハリン、択捉、国後において掃討され、中华人民共和国の空海軍は黄海で追撃されてしまった。

結局、各国は様子見に留まることを余儀なくされるのである。

さてもさても古代日本の神々の意気は昂揚し、集まった衆は総計で1千2百万を超えた。かくして修羅の軍は地上界では随一の規模となったのである。

こうなると世界の神々も黙ってはいられない・・・はずであったが、まずは日本の主、大日霎貴神がどのような対応・反撃に出るかが注目された。

2　大日霎貴神

「ここに新たな王城を建てるわ」

イユノは宣言し、議事堂を中心に四谷・新宿・澁谷・品川・新木場・秋葉原・日本橋・銀座・永田町を結ぶラインで不規則な形の広大な城砦を一晩で築き上げた。それは豪奢静謐逸楽に満ちた豪華絢爛、繁文縟礼な装飾にあふれ、七箇所に高さ千二百メートルの監視塔が立ち、中心には高さ五千メートルを超す尖塔が聳える。修羅（彝鬣羅婁）城と名付けられた。

入口はお台場から天王洲アイルに跨る壮麗な南門が築き上げられる。この南門から入ると、直径二十メートルの数多の列柱と高さ五百メートルの大理石の天井のある、幅三百三十三メートルの行列廻廊があり、王廷に続いていた。

円柱に囲まれた荘厳なその玉座に坐し、イユノはいならぶ臣下を眺め、こう言った。

「まずは悪を罰する。炎を挙げる。鉄槌を下すのだ。

すべての腐敗政治家と財閥と暴力組織、金銭の亡者どもを即刻処刑する。裁判は行わない。それが見せしめだ。

悪には一切の猶予を与えない。冤罪も辞さない。過酷に対処する。

そうすれば誰もが慎重に己の行為を考え、悪と誤解され兼ねないようなことすらしなくなるわ。

それは処刑と言うより、正確に言えば処分だわ。二十人一束に縛ってゴミ焼却場で燃やして捨てる。

なぜならば、人間の価値は生まれや育ちで決まるものではないからだ。

その人の行為によって決まる。

人に非ざる行為をした者は人間ではない。だから人権はない。喪失したのだ。人に非ざる行為をした者は自ら望んで人権を放棄したのだ。よって人間として扱う必要がない。

だからゴミとして処分する。また人に非ざることをした者を弁護擁護する者は責任を負う。すなわち弁護した被疑者に罪有った場合は弁護人を同罪とする。

すべての発言に責任を伴わせるのだ。すべての人間は加害者の立場ではなく、被害者の気持ちにならなければならない。無責任な発言は赦さない。これが阿修羅の法律よ。

何かおかしいかしら？　横暴かもしれないが罪を犯さなければ法も執行されない。ないも同然になる。だから乱暴じゃないわ。要は悪をなさなきゃいいのよ。善悪の区別もつかないような愚かなやつを守るために善良な者が犠牲になる時代は終わったわ。すべて偽善的な人権擁護者の無責任な発言で罪のない多くの人が犠牲になった。その罪を償わせるわ。犯罪者を擁護したすべての者は犠牲者と同じ目に遭わせる。当然よ。やったことには責任を取ってもらうわ」

「御意」

イヴィルが深く辞儀をした。イユノ・アスラは真紅の玉座に坐し、

「そしてわたしたち革命政府に逆らう反革命勢力は徹底粉砕する」

「しかしイユノ・アスラ、それを執行するあなたの立場をいかがなものといたしましょうか」

「どういうこと？」

「法を執行するには、法を執行する権限を持つ立場の者にならなく

てはなりません。あなたは処罰を執行する権利を持つ者にならなくては法を執行できません」

「ああ、たとえば大臣とか、委員長とか、そういう地位に就かなきゃダメってことね」

「まあ、そういうことです」

「ならば世界連邦皇帝になるわ。

大日霎貴神に奏上して世界連邦（連邦：自治権のある複数の国、または州が対等な関係で連合し、連合の中央政府を置く国家）の皇帝に叙任してもらうわ。

大日霎貴神の名の下に、世界連邦皇帝となって、新憲法を宣告発布し、我が正義を強く宣言するのよ。

それでいいでしょう？」

「御意」

「早く世界を征服しなくっちゃね。

東京から発信して東京がリードし、東京から世界を変えるのよ。

あはははは」

「では早速、新憲法を世界に向けて発布いたしましょう」

「そうね。全世界の全メディアに載せて全世界の人民に知らしめて。全国の全政府に通知して。

そして全世界の神々にヴァイブレーションしてちょうだい。ある意味宣戦布告かしら？　でも、侵略じゃないわ。正しい真理の法の下に連盟するのよ。協調するのよ。

ふふ」

そして宣告発布のために、丸めて青と赤のリボンで結んだ一枚の金刷りの憲法を一千億枚用意した。しかし思惑どおりにはいかないもの。それはあたかも阿修羅の気まぐれのようなものだ。いやいや、それに比べたら、こちらは当然想定の範囲内になるか。海外からは何の反応もなかった。むろん民間レベル的な義勇兵は相変わらず世界中から集まってはいたが。

「無反応？　反発反応や怒りすらないのか。完全なシカトか。

まあ、いい。時期尚早だからな。

だが、少なくとも国内は固めたい。決めたい」

伊勢神宮へ使者を飛ばす。使者は同源布羅咒若を選んだ。しかし大井川（静岡県）が越えられなかった。

立ち塞がった神は天日鷲翔矢命、またの名を麻植神、天加奈止美命（天金鵄）、天日別命だ。

布羅咒若は報告して言う、

「天日鷲は皇大御神の使いです。

イユノ・アスラ＝彝甃羅婁の奏上を拒否するとのことでした。

ちなみに、大国主命と須佐之男命の娘である多紀理毘売命との御子、阿遅鉏高日子根神、別名で迦毛大御神と呼ばれる神が傍でこの様子を見て笑っていました」

イユノ・アスラは憤慨した。

「よし。ならば、このわたしが直接、皇大御神に奏上しよう」

イヴィルが制した。

「それはまずいでしょう。

ヤマトから見れば核攻撃を受けるようなものです。相手に対する威嚇です。全面戦争になります」

「仕方ないじゃない。

だからって黙っていられないわ。こっちはそんなつもりないんだからさ。

本当に何でこの世の中ってこんなにも面倒臭いんでしょうね。あっちこっちで思惑があって立場があってギャンギャンうるさい。ぅぜーよ、って言いたくなるわ。同源布羅咒若に修羅城の護りは任せるわ。百万の眷属を守備隊にして、他は皆わたしについて来なさい。

せっかくアスラなんだから存分にやらせてもらうわよ」

イユノ・アスラ＝彝甃羅婁は西征した。

守備隊を除いても進軍する者の総勢は二千八百万、この超弩級の大軍で鎌倉に布陣していた月読神を退け、箱根で瓊瓊杵尊・木花咲耶姫命・彦火火出見尊を追い出し、神石の大御神を立たせ、大井川

では天日鷲翔矢命とともに阿遅鉏高日子根神をも撃破し、大河を渉った。

岐阜の不破でヤマト軍と決戦し、一日（いちじつ）で大勝、遂に大日霎貴神から勅使が訪れ、「拝謁を許可する」旨の神の神なる勅書状が下された。

書状は太陽の聖なる黄白色に燃え輝いている。したためられた文字は小野道風や王羲之よりも遙かに素晴らしい。

「来たか」

イユノ・アスラ＝彝甃羅妻はそう呟いただけだった。

イヴィルが言う、

「見せてください。よろしいですか。神の宮に入るためには位（くらい）が必要なはずです。人間で言うところの官位です。

ああ、ここにあります。勅授ですね。五位以上というわけですよ。ふむ。従四位の下、兵部省の卿に叙する、と」

「意味がわかんないわ」

「結構です。意味など不要です。さあ、イユノ・アスラ卿（いや、わかりました、止めます、そう呼ぶことは、そんなに嫌がらなくても）よ、随行するメンバーの選定をお願いします。私が推挙しますのは」

「いや、すべてわたしが選ぶわ。あなたはダメね。外国風だもの。ユレヒトもよ。いい？　純和風で行くわ。

茸柳、アカネ、淋太良、イタチ、あなたたちが来なさい」

「御意」

眞神革命軍の陣の前に、ヤマトの神勅の使者数百名が音も立てず待っていた。天馬の牽く神玉璧の車が用意されている。

「いいわね」

イユノが満足げにうなずいた。

かくして総勢5名は使者とともに天翔けて伊勢神宮へ向かう。

伊勢に行くと巨大な高天原への壮麗な太陽の大階段があった。聖なる天上の檜で調（ととの）えられ、清らかな黄金のような芳香で輝いていた。

階段の両脇には神々からなる眩い百官がずらりとならんでいる。
イユノは階段を見上げた。それは雲を超えるあたりで消えている。
思兼神が進み出でて車へと導いた。
「さて、阿修羅殿、これに乗られい。大御神様がお待ちです」
それは光燿く鷹と鷲と隼が牽く絢爛たる錦の車である。イユノら一行は車に乗った。一気に駈け上がり、階段の消えたところでは蒼穹を翔けた。あっと言う間に成層圏を超え、月を過り、巨大な炎の太陽を超えて星空を廻り、星雲を凌駕し、光より速く大銀河団を翔け抜ける。速過ぎて何もかも目に留まらない。
「凄いな」
茸柳が素直に驚いた。
「宇宙を三歩で闊歩するおまえが何言ってんだ」
イユノが笑う。
高天原は宇宙よりも広大で、かろらかさやか、光燦の海の原のようであり、光の砂漠のようであり、光燦のそよぐ草原のようであり、光の潮のようであり、光の雲霞のようでもあった。
きよらかな光の河が広く大きく、それでいてさらさらと流れている。
大日霎貴神のいまします神の大宮は聳える山のようであったが、その燦々と眩いも木造建築の頂点は遙かに彼方で到底視覚の及ぶところではなかった。その清浄さ、えも言われず、ただただ驚嘆するばかり。
車が門衛の前に着くと見たことも聞いたこともない二柱の神将がいた。門の扉は透明で、同じく透明で途方もなく大きな円い鏡が嵌っていた。扉もまた高く、上が見えない。
「イユノ・アスラ＝彝甃羅妻、禊をお願いいたす。斎戒沐浴していただこう」
神将が言った。
「わかった」
イユノは車から降り、素直に従う。

清冽な瀧が現われた。イユノは服を脱ぎ捨て烈しくて冷たい水に打たれる。他もそれに従った。

門扉が開く。まるで爽やかなそよ風のように。

「何と清楚で心地よい香りだろう」

淋太良が思わず言う。

扉が開くとそよ風とともに心癒す香りが流れて来たのだ。アカネも頷く。

「ほんとね。

ここには軽やかさ明るさ清々しさ心地よさしかない。

この神宮だって、こんなに巨大な建築なのに、まったく威圧感がないわ」

「そうよ。

これがヤマトの精神なのよ。いまは廃れているようだけどね」

イユノが無関心にそう言い、「さ、行くわよ」と促す。濃厚な青の龍が刺青のように全身を覆う唐紅の皮膚のイユノは高天原ではあまりに異様で異質な存在であった。

「お待ちしておりました」

恭しく辞儀をする白鬚の男は侍従であった。「ご案内いたします。これにお乗りください。どこからでもお乗りいただけます」

薄(うっす)らと黄金色をした雲が現われる。イユノらが近づくと、その眩い黄金光はゆっくり大きく動いた。雲は揺れることもなく、風切る音も立てず超光速で飛ぶように進む。建物の正面玄関から広大な廊下を通り、大きな階段を上り、謁見の間に到達した。

広大な神なる木造の広間である。高雅な檜の匂いがしていた。そこには高天原への階段にならんでいた百官がずらりといならぶ。先ほどとは異なる華麗な正装で春爛漫か秋錦繍のようであった。笙や篳篥の音がかすかに聞こえる。篳篥は大篳篥で、吹き手は楽聖と称讃された源博雅。

イユノは見廻す。

奥に燦めき廻り動く光輪で囲まれた高御座(たかみくら)があり、雲を纏う天蓋

を備え、霞のように繊細な白金の御簾が垂らされている。
イユノは眼で茸柳やアカネらに合図し、膝を突いて柏手を打ち、礼拝した。他の四人もこれに随う。
坐の傍らに立っていた最高位の独神にして祖神（おやがみ）なる天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）がが宣（のたま）った、
「従四位の下、イユノ・アスラ＝彝甃羅婁卿、汝の奏上文をここに読み上げる。
ぅわをおぉぉん。ぅふぅむ。
『天燦めく眩き清爽なる光にて久遠に燿く崇高至上の聖なる大日霎貴神に永劫不滅の弥栄あれ。火々禽の柵の戦後、誓いにより臣なりし眞神の守衛、彝甃羅婁の裔、此處に信義忠節の限り真情を以て申し上げます。
世は堕落し、正しき神は廃れ、貪（とん）（ものおしみ・むさぼり）、瞋（じん）（怒り・憎しみ）、癡（ち）（真理を知らぬこと）の三毒によりて蹂躙されております。将に此の三悪が宇宙至高全の神であるかのように王威を振るっています。此れを正し、萬民を救い、神の理法を知らしめる。我が希いは只唯之に尽きる。
尽きましては我此處に願う。
我をして世界皇帝の坐に就くことを赦したまえ。
以上、惶れ惶れ崇め畏み畏み錄す。
眞神郡龍呑村　平衛イユノ・アスラ＝彝甃羅婁
阿僧祇那由多不可思議無量大数宇宙皇神　眞秀神倭（まほろばカムヤマト）の神　奥極眞正義　大日霎貴神（おおひるめのむち）　神を皇（すめら）ぐ神の神なる大御神（おおみかみ）へ　臣奏上す』
これに相違ないな、兵部の卿」
イユノは立ち上がって応えた。アカネたちが顔を見合わせる。
「相違ない」
天の御中主が表情を堅くする。
「無礼であるぞ、兵部の卿。平伏せよ」
しかし修羅は一歩進んだ。茸柳が立ち上がる。
「なぜか」

天之御中主が眉を上げた。
「大御神様の御前であるぞ」
イユノはさらに一歩踏み込む。茸柳が一歩歩み、アカネが立ち上がった。
「約束を破ったのはそちらだ」
そう言いながらイユノはさらに踏み込む。茸柳とアカネがその後に、そして淋太良とイタチも立ち上がった。百官が身構える。
「無礼者！」
緊迫した空気。そのとき。鈴の音のように涼やかな明るい、快い声が。
「待て、御祖なる天之御中主の大神。イユノ・阿修羅＝彝甦羅妻に思うところを述べさせよ」
「しかし大日孁貴神様」
「よい。朕らが許す」
「御意」
イユノはしゃがんで胡坐をかいた。
「じゃあ、話そう。
まずは出雲や下野や常陸・下総の神々が眞神を襲った。理由はアスラが復活してヤマトに叛逆を企てているというからということだった。
だが、我々はそのような疑いをされるような覚えがない。永きに渡って忠義を尽くしてきた。それなのに高天原からの神勅で進軍して来たという彼ら神軍は我らの話を一切聴こうとせず、罪有りと決めつけてきた。
おかしいではないか。なぜ我々を信じない。信じられない理由があるならば、それを説明すべきである。信義に背いた裏切り者とは、むしろ汝らヤマトの側だ。違うか」
イユノの体の奥から大銀河団も震わすような雷霆の重い響きが轟いた。
静まり返る廷。

やがて静かに大日孁貴神の声が響き徹った。
「宜しい。
おまえの望みは何だ」
「宜しい、だと？
どういう意味だ？　ヤマトの誤謬を認めるか。どうか。そもそもヤマトが眞神を疑った理由は何だ？　アスラを疑った理由は何だ？　復活だけで脅威か？　核兵器を持っているだけで侵略されなければならないのか？」
静寂。
「問いへの答を聴きたい」
閾（しず）かであった。
イユノはさらに責める。
「ヤマトの正義は潰えたのか。太き道は衰えたのか？　天地を治める神威は萎えたのか。だから出雲族らの叛逆があるのか」
これには百官が騒ぎ、天之御中主神が嘲るように嗤い、知恵深き思兼神（おもいかねのかみ）が問うた、
「反逆と？
兵部の卿殿、何ゆえさように申されるか」
イユノは傲然と見返した。
「知れたことよ。
出雲・下野・常陸・下総の神々は眞神まで攻め来てながらいずれの軍も戦い敗れると、潰走してその後は攻めて来ず、我々は今日まで一度も見ていない。火々禽の柵の戦い以降、会（まみ）えたのはヤマトの軍ばかりだ。東京に到るまでヤマトの軍以外は見なかった。
思うに出雲・下野・常陸・下総は本気で眞神と戦う気はなかったのだ。そうとしか思えない。闘う振りをしていただけだ。ヤマトの手前、そうせざるを得なかった」
「なるほど」
思兼神が薄ら笑いを浮かべて合槌をうつ。イユノは眉を顰めたが、話を続けた。

「もう一歩進めて考えれば、眞神とヤマトが闘って互いに消耗し、弱体化したところを一気に攻める・・そういう考えができなくもないわ。

斐伊（出雲）も毛野国（上野国と下野国を併せた地域）も日高見国（奥州、常陸）も、言わずと知れた古代の大国よ。下総にある香取神と常陸の鹿島神も連合し、すなわちヤマトを斃し、東北・関東の過日の栄華を取り戻そうと考えたとしても不思議はない。

どう？」

思兼神は苦虫を潰したような表情だ。イユノが笑った。

「どう？　焦っている？」

「呆れ果てているのだ。わしらはまさしく卿が言うとおり信義を守ろうとしているだけだ」

「は？　イミフなんだけど？」

「イユノ・アスラ＝彝甃羅婁よ、待て。そして止めよ、思兼。朕らが話そう。

聞きなさい、イユノ・アスラ＝彝甃羅婁」

「いいわ。でも、どういうこと？　何か裏がありそうね」

「よいか。

まず身近な話から始めよう。

おまえは最近、男子と訣別したな」

「訣別？　ああ、カレシと別れたってこと？　そうだよ」

「それはおまえの仕組んだことだ」

3　群雄割拠及び四面楚歌

「ふうん、そう。

まあ、わたしは全知全能らしいからね。そういう説もわたしらの中ではなくもなかったんだよね。で？」

「その事件がなくば汝は目覚めなかった。あれは何時が自らの目覚めのために仕組んだ目覚まし時計のようなものだ」

「あなたが目覚まし時計を知っているとは思わなかった。それの方がよほど想定外だわ」

「男女の事というものは人間的な精神の最深部を直撃するものらしいな。おまえが目覚めに選んだのは理に適っている。

ところでお前はなぜ男女の情が人間存在の深部に到るかわかるか」

「雌雄が分かたれる必要があるからさ」

「そうだ。遺伝子を混ぜて新たな組み合わせを作るためだ。古代の単純な生物は細胞分裂を行って種を増やした。しかしそうすると遺伝子が多様性を持たなくな進化しにくいし、型の合うウイルスが現われると全滅の危惧すらある」

「よく知ってるよ。なぜ雌雄の2種類しかないかがよくわからないが。混ぜるなら10種類ぐらいあってもよかったんじゃないか」

「遺伝子を残すこと、子孫を残すこと、人の営みのすべては実は最奥ではそこに収斂されている。だからすべての物語、詩、芝居や絵画彫刻には恋愛がまとわりつくのだ。

子孫繁栄こそ至上の命題なのだ。なぜか。畢竟、種として存続すること、すなわち宇宙を構成する一末端が欠けることがないようにするための仕組みなのだ。さればこそ時に人は個体の損失（死）をも怖れず恋愛感情を突き進む。子孫の存続が個体の保存によりも重要だと本能が教えるからだ。

よってそれが正しいわけでもなく、真実であるゆえでもなく、実体なるがゆえに……でもない。畝員を生み出さないため、畝如、畝陥を生じさせないためなのだ。そのための方便に過ぎない。

実体のない方便、絡繰り、架空、現象だ。

人間は自由意志で動いていると感じているが、理性も思考も哲学も感情も恋愛も、大基幹底はそこにあり、すべてそこから生じている。自然の与えた命題を営むに過ぎない。思考も光合成も何が変わろうか。

また、現に物理的現象として見るとき、思考（インパルスの伝わり）と植物の生成（光合成など）の化学的現象であることに何ら変

わりはない。その現象の意味の内部（コンテンツ）にいるから愛や哲学なのであって、現象として思考も元になる価値設定や了解の構造がドーパミンやアドレナリンの分泌であるに過ぎない。内部的にいる当事者にとっては真や善や美であり、世界であり、愛情や家族すなわち子や父母や愛する者であり、怒りや苦しみや歓びや哀しみであり、蝶や花や雲や空や海や木や草であり、科学や哲学や宗教なのである。

光合成だってその内部にいる植物とっては思考であり、コミュニケーションであり、スポーツであり、娯楽であり、食事であり、文化であり、慈善奉仕事業であり、ロックコンサートや詩でもあるのだ。ただ人間とは周波数が異なる帯（ベルト・位相）にいるからまったく理解できず、それゆえそのように見えないだけなのだ。

個人の自由意志などない。すべて決まったレールの上を刹那的・化学的・物的現象として存在している。つまり人生などない。生ある者は最初から存在していたし、今後も存在し続ける。生誕もなければ死もない。それが実態であり、真実であり、事実であり、現実だ」

「つまりその現実とやらがわたしだ。森羅万象であり、『存在』であるわたし、アスラだ」

「それがわかって、なぜ知らぬのだ。

すべておまえが仕組んだものだ、運命の神よ」

「え？

アスラの目覚めのために、眞神を攻めろと、五千年前に契約させたのはおまえだ。朕らこそ信義を尽くしたぞ。

見よ、いまや日高見国、越国、毛野国、木伊国、筑紫国、火之国、球磨噌吸国は独立宣言を行った。眞神が独立国家として認められたのなら、自分らも認めよ、ということだ」

「独立国家だって！」

「そのとおりだ。彼らは火の国連合と称している。

そう言うおまえであっても、世界皇帝になる以上は高天原の下に

はおられまい」
「ふむ。
確かに、結果的にはそうだわ」
「当然だろう」
「で、七つの国と戦争するのか？」
「軽々しく言うではない。しかしともかく、おまえたちの独立を認める。
一応言って措くが出雲や毛野や日高見は契約のことは知らぬ。他言無用とおまえからの念入りに指示があったからだ」
「知らなかった。知るはずもない、自分でそう設定したのだから。聞けば聞くほど、ごめんって感じだな。なぜわたしがこんなことを企んだのか、訊いてもわからないだろうな」
「知るよしもない。と言いたいところだが、こちらも理由を訊く権利ぐらいはあると思った。だが訊いたがおまえは教えなかった」
「だろうな。
そう思えばシノブも自分が隠しているような気がしてきた……」
「シノブ？
葦原シノブ・羅刹斯（ラークシャシー）のことか？」
「え、知ってるのか、まさか」
「そのとおりだ。おまえに頼まれて預かっている」
「うーん。でもあんなに人を殺して……」
「それもおまえが頼んだことだ」
「ええ！　そんな莫迦な」
「何が莫迦なものか。
考えてもみよ。洪水は人を殺さなかったか。隕石の落下は多くの命を奪わなかったか。車は人を牽かなかったか。一つの民族が他の民族を殺さない時代があったか。殺人のない日があったか。地震は人を殺さなかったか。稲妻は人を殺さなかったか。銃が人を撃たない時間があったか。有史来、虎が兎を銜えない世紀があったか。老

衰のない日があったか。医療ミスがない年があったか。津波は人を殺さなかったか。

宇宙で起こるすべてはおまえの責任だ。同じようなことを、言葉を変えておまえも言っていたではないか。違うか。

おまえは全知全能だ。おまえが宇宙の一切だ」

「ぅううう。じゃあ、あなたもそうなのか」

「むろん、そうだ」

「意外にあっさり認めたな」

「当然だ。そんなものは何でもない。神はそのような、つまり人間に意識のような地平にはいない。地を這う虫ではない。

そんなことにこだわるのは狭い牢屋に閉じ込められた意識だけだ。何の意味もない。そんなことに固執し、必死になっているのは愚かな者、すなわち人間どもだけだ。むろん、彼らはそのように造られたからそうになっているに過ぎないが。

すべては根底から誤っているのだ。誤りという概念さえ。あははははは」

神は太陽の哄笑をする。偉大なるかな。

「わかった」

イユノ・アスラ＝彝甃羅妻は項垂れて帰った。アカネも慰める言葉がなかった。しかし戻るなり、イヴィルが、

「イユノ・アスラ、大変です。

東北や北陸や常陸や関東甲信越や紀伊や九州が、日高見国、越国、毛野国、木伊国、筑紫国、火之国、球磨囎唹国と名乗り、蜂起しました。

七つの国はヤマトと眞神を斃すと宣言し、連合しました」

「何だって？」

「それだけじゃありません。

アメリカ海軍が再来襲してきましたが、軍艦の上には、片目が無く、長い髭を持ち、つば広の帽子を被ってグングニル Gungnir 槍を持つ恐るべき怒りの神、戦争と死の神、過酷なるオーディン **Óðinn** を始め、北欧の神々が聳え立って日本列島を睨んでいます。

いいえ、そればかりではありません。

ロシア艦隊には、

雷神ペルーン *Perun*

太陽神ダジボーグ *Dazhbog*

太陽神ホルス *Kghors*

火神スヴァローグ *Svarog*

風神ストリボーグ *Stribog*

七頭神セマルグル *Semargl* 他

中国艦隊には、

天帝

蚩尤

泰一 他

イギリスやドイツ、フランス艦隊には、

天空神トータティス *Toutatis*

太陽と雷霆の神タラニス *Taranis*

光の神ルゴス *Lugos*（またはルグ *Lug*）

槌と杯を持つ神スケッロス *Sucellos* 他

その他各国の軍に各国の古代神が燦然と炎のごとく輝きながら、この国を目指しています」

イユノは怠そうなウンザリした顔をする。

「わかった。わかった。

じゃ、世界中を相手に戦えばいいのか？」

誰も答えなかった。

イユノはユレヒトやヌエを見た。項垂れているだけだ。

アカネや淋太良やイタチを見た。項垂れているだけだ。

布羅咒若を見た。黙っている。

イヴィルは下を向いて歎息した。

「そう。

わかったわ。

別によいじゃん。勝ったって、負けたって、同じことじゃない。だって、違うっていう概念がもう是でも非でもないんだからさ。試しに負けてみる（笑）？」